



高松キャンパス表彰式



詫間キャンパス表彰式

【高松キャンパス】.....

読書感想文

優秀賞	建設環境工学科 2年	野崎 ゆな
佳作	機械電子工学科 4年	坂東 幸奈
佳作	電気情報工学科 2年	岩井 亮大
佳作	1年4組	梶谷 奈未

千頁読破記

優秀賞	電気情報工学科 4年	松下 祐子
優秀賞	電気情報工学科 3年	安丸 怜那
佳作	機械電子工学科 2年	岡本 岳人
佳作	建設環境工学科 2年	中村 倫浩

夏休み体験文

優秀賞	電気情報工学科 4年	平尾 知也
佳作	電気情報工学科 2年	羽野 祐太
佳作	機械電子工学科 2年	浜口わかな

【詫間キャンパス】.....

読書感想文

最優秀	電子システム工学科 3年	勝田 稚菜
優秀	電子システム工学科 3年	岩崎友里亜
優秀	1年7組	河田 莉捺
佳作	通信ネットワーク工学科 3年	旭 瑞歩

講評

高松キャンパス  
一般教育科 坂本 具償



今年の応募総数は、読書感想文が156篇、千頁読破記が206篇、夏休み体験文が227篇で、合計589篇でした。では、この図書館だよりに掲載された入賞作品に対して少しばかりコメントしていきましょう。

読書感想文・優秀賞の野崎さんの「コンクリートを巡る旅」(藤原忠司著)について。先入観を捨てて木材にもコンクリートにもきちんと向き合ってその特徴を知ることの大切さを読み取り、今まで「コンクリートが批判されている印象を持っていなかった」自分が、この本をきっかけにしてそのような批判があることを知ったことは重要です。そこから出発して、ぜひ「コンクリートから人への贈り物」ができる技術者になってください。

読書感想文・佳作の坂東さんの「永遠の0より」(百田尚樹著)について。「戦争」というものについて、今までは何の根拠も確信もない「繰り返してはならない悲劇」という皮相的な言葉しか並べられなかったということですが、この書物を通して「私たちの命は戦時中必死に戦

い必死に生きた人々の犠牲の上にある」という確信を得た今、「戦争」とは何かについて、少しだけでも坂東さん自身の言葉で捉え直すことができるようになったのではないのでしょうか。広島原爆資料館で見たものの意味も含めて。

千頁読破記・優秀賞の松下さんの「本を読むということ」について。三千頁を超える読書の報告です。千頁読破記を選んだ理由は二つ。一つはどのくらいで千頁になるのか。もう一つは紙の本の良さを味わいたいこと。その目的の下、想像や考察を繰り返し、丁寧に読んだ結果、登場人物の心の中を想像することは、「彼らに生命を与えることと同義」であり、「(物語に)生命を吹き込み、生かすことが読者の想像」であり、その想像によって「作者の言葉に返事をするができる」と感じています。それはもう、当初の目的を遙かに超えて、「本を読むことの本質」を捉えています。「達成感というよりは充実感でいっぱいになりました」は、実にそのことを示しているのですね。

同じく千頁読破記・優秀賞の安丸さんの「芸術を感じるということ」について。絵の批評に関する書物を8冊ほど読んだ文章です。芸術を「一過性の感情の具現化」と捉え、故に「判断する私たちも一過性の感情にまかせてもいいのではないか」と主張しています。芸術を世の批評家のありがたい批評によりかかって判断したくないという主張は、まさに芸術鑑賞の本質を見事に突いているよ

うに思います。誰がなんと言おうと好きなものは好き、嫌いなものは嫌い。感動したのは、誰でもない自分自身なのだから。

夏休み体験文・優秀賞の平尾君の「夏休み体験文」について。これについては選者の担当主事から凡そ以下に示すコメントを頂いています。

夏休みのある日、ふとしたきっかけから「ウズラ孵化」に興味を抱き、実際に孵化させるまでに熱中した一連の様子が実に面白く、こちらも深く興味を持って読ませていただきました。生き物の「生と死」を実感する貴重な体験をされたと思います。

## 詫間キャンパス

一般教育科 富士原 伸弘



平成27年度の読書感想文コンクールは209編の応募を得た。その中から最優秀に電子システム工学科3年勝田雅菜「『わたしはマララ 教育のために立ち上がりタリバンに撃たれた少女』を読んで」。優秀に電子システム工学科3年岩崎友里亜「『自分』の壁」と情報工学科1年河田莉捺「一人の小さな研究家が信じて走る道」。そして佳作に通信ネットワーク工学科3年旭瑞歩「阪急電車」が選ばれた。最優秀の勝田さんは1年生の時に「科学者レイチェルカーソン」（平成25年度）で優秀賞を受賞して

以来、2年越しの初戴冠である。研究者レイチェルカーソンへのあこがれを素直に書き表して好評を得た前回と同様、マララさんへのあこがれと現代日本に生きる「平和」への思いが率直に表現されており、多くの審査員から共感を得る結果につながった。岩崎さんは昨年度の「夢を見て、生きるということ」に続いて2年連続の優秀となった。昨年の「夢」から「個性」へとテーマを移し、自分自身や現実を見つめ直す思いを独特の文体でまったりと綴った。「見つめ直す」スタイルでの連続受賞は見事だが、今後は新しいスタイルにも挑戦して欲しい。審査において同点となり、2編目の優秀となった河田さんの「一人の小さな研究家が信じて走る道」は、よく練られた力作。印象的な表現を求める余り、やや文章にわかりにくさがあるのは残念であるが、1年生での、この構構力は秀逸である。今後に期待したい。佳作の「阪急電車」は、2011年に映画化もされた有川浩のベストセラー小説を扱った作品。強烈なメッセージは無く、「胸キュン」な感想がさらりと述べられており、本を読むことの楽しさを再認識させられる好編である。

27年度の読書感想文コンクールを終え、総括として、昨年度と同じ文章を敢えて以下に再掲する。二度とこの文章を使わずに済むことを切望する。

今回も「盗作」が発見された。「コピペOK」などというHPの記事を鵜呑みにしてはいけない。「自分自身で書く」文章に誇りを持って欲しい。これは上手下手の問題ではない。「夏休みの読書感想文なんか盗作で構わない」と感じている人は、文章を書く前に、「平気で盗作をする自分」の姿をよく思い浮かべて欲しい。次年度の読書感想文コンクールには期待したい。

## 入賞作品紹介

〈高松キャンパス 読書感想文〉

優秀賞

### コンクリートを巡る旅

建設環境工学科2年 野崎 ゆな

私は、夏休みの目標として、異文化との交流を深める、専門書を読む、早寝・早起きをきちんとするなど様々な目標を立てました。目標を達成するべく学校の図書館で専門書を探していましたがどの本もとても難しく、専門書を読むのは早いかな、と諦めかけたとき、「コンクリートを巡る旅」というストーリー性もあり、コンクリートに

関してもたくさん学べそうな素晴らしい本に出会いました。

この本には主に、ダム屋の杜武、大学教授の鈴木の二人で日本各県を巡って「自分探しの旅」をするお話です。この二人は四十歳の時にあったクラス会で再会しました。二人の性格は全く違いました。ダム屋の杜武はコンクリートが大好きなためにコンクリートを批判されることに憤りを感じることで、土木にずっと関わられるようダム屋に勤めるくらい土木を愛していました。一方で大学の教授の鈴木は若いころの人為的なミスによりコンクリート、土木に対してあまり好感を持たなくなり土木事業について考えるために教授になるという冷静かつ真面目な性格の持ち主でした。考え方が全く違う二人ですがコンクリートが否定されるのは虚しい、目的は違うかもしれないがコンクリートを巡る旅がしたいという共

通の思考により鈴木のご案内の下旅が始まりました。

最初に訪れた場所は、奈良県の法隆寺です。法隆寺は流行病の平癒を祈って用明天皇、推古天皇と聖徳太子らによって六百七年に創建されました。なぜコンクリートを巡るたびに木造の法隆寺なのかと私は思いました。一番目にここを選んだ理由は少し読み進めたらわかりました。同じ建設材料で、材料として大先輩の木造について知るためです。木は古木になるにつれて強度は上がり一番の強度を迎えるのは二百年だそうです。こんなに素晴らしい特徴を持っている木材に建設材料として新参者であるコンクリートは匹敵するのかと疑問を投げかけるためでもあったのです。木材もコンクリートも初めから駄目なものだと批判するのではなく、いろいろな面、特徴を知っていく事に杜武は気付くとともに鈴木のしっかりとした旅を考えてくれているのだと二人の仲が縮まった法隆寺でした。

私は、この本を読んでコンクリート構造物についてたくさん知ることができました。特にダムの仕組みです。ダムは極端にいうと重さが大切でずれたりしないよう重い特徴を持つコンクリートが使われているそうです。また、鉄筋コンクリートの話も出てきました。鉄筋コンクリートは高専を入学して最初の専門の授業で教えてもらった専門的な初歩の知識です。日本最初のコンクリート構造物の話中に鉄筋コンクリートを使った橋が出てきました。コンクリートの橋は周りの緑いっぱいの景観を台無しにしていますが、コンクリートの歴史、作った人の努力を知るととても愛着が湧きます。

彼らが最後に訪れた場所は山口県の徳山にある島地川ダムです。ここでの二人の会話で感動した言葉があります。それは、

「『コンクリートから人へ』とは、極端に言えば、コンクリートをやめて、人を大事にしようということだよ。つまり、『から』とは、『移行する』という意味も持っている。でも、『から』には、別の意味もある。これは私から貴方へのプレゼント、というよね。この場合の『から』とは、ちょっと表現しにくいけど、『…による』というような意味ではあるまいか。それでどうだろう。『コンクリートから人へ』を拡大解釈して、『コンクリートから人への贈り物』というのとは」

という言葉、会話です。二人が各県の様々な構造物を見て意見を出し合いあらゆる方向でコンクリートの存在意義について学べたことがわかる文だと私は思います。

私はコンクリートが批判されている印象を持っていなかったのですがこの本を読んでコンクリートをみんなのように思っているのか興味を持つことができました。この本ではコンクリートの批判を「無駄な公共事業の代名詞」

政治家が「コンクリートではなく人を大事にする」と発言したなどが紹介されていました。少し昔のことかなと思いついてインターネットで調べるきっかけになりました。

また、私は今まで小説は物語しか読みませんでしたが今回の本は会話と少しの解説で成り立っていたので少し内容が難しく、作り物語でなくても楽しく読むことができました。ことわざがたくさん使われていたり専門的な知識が学べたのでこの本を読んでよかったなと思いました。これからも少しずつ難しい本、専門書に挑戦したいと思います。

私は特にこれといって大好きな構造物はありません。建設系の学科の先輩は自分が大好きな構造物についてたくさん語っていました。私も橋やダム、構造物ではなくコンクリートなど大好きなものを作り一生それについて語れる仲間がほしいと思いました。

技報堂出版

コンクリートを巡る旅 ～コンクリートから人への贈り物～  
藤原 忠司 (著)

## 〈高松キャンパス 読書感想文〉

### 佳作

#### 「永遠の0より」

機械電子工学科4年 坂東 幸奈

「・・・堪えがたきを堪え、忍びがたきを忍び・・・」

1945年8月15日、昭和天皇による玉音放送と共に長きに及んだ戦争は幕を下ろした。そして今年、日本は戦後70年の節目の年を迎える。

もし今誰かに、「戦争について何をしているか？」と問われたら「繰り返してはならない悲劇」という何処にでも転がっている言葉しか私には並べられないだろう。確か、小・中学生の時、お年寄りから戦争体験を聴いたり修学旅行で沖縄を訪れ「平和の礎」や「ひめゆりの塔」などを見学したが、所詮は他人事、実際に徴兵された人や攻撃から逃げ惑った人の本当の気持ちなんて分かるはずもなかった。小学4年生の時、授業で広島「原爆ドーム」について学習した時なんて自分のしたことをとても後悔した。なぜかって？それは先生やクラスみんなに自慢したくて、親に頼んで連れて行ってもらった時のこと。一通り原爆ドームをカメラに収めた後、いよいよ待ち望んでいた資料館の中へ入った。今思えば可笑しな話だが、当時の私の中で戦争ブームが沸き起こっていた。図書館にある戦争体験記や絵本を読みあさり奇妙

な達成感のようなものを感じ、1人鼻高々な気分になっていたのである。しかし、そんな私に「真実」という2文字が容赦なく襲い掛かってきたのである。見るもの全てが悲惨で残酷、徐々に身体が熱くなり頭がぼうーとし、気分が悪くなり口の中が酸っぱいものでいっぱいになった。母に早く出ようと急かすと、あんなに来たいと言っていたのに何を言っているのかと怒られたのを覚えている。そして、最も衝撃的だったのが「水をください」と書かれた文字を見た次の瞬間、目に飛び込んできた光景だった。それは、原子爆弾の放射熱により皮膚がドロドロにたれ下がった親子を蠟人形で再現したジオラマだった。今にも動き出しそうで、今にも声が出そうで、今にも私の方を見て「これが戦争だ！」と叫ばれそうで全身から血の気が引くのが分かった。その感覚が8年経った今でも身体から離れていない。あまりのリアリティに親子の姿が脳裏に焼き付いてしまい、数日ほど思い出しては怖くなって夜なかなか眠れなかった。そして、もう絶対にここへは二度と来ないと心に決めてしまっている哀れな自分がいた。もう戦争について知りたくないという臆病な自分もいた。

しかし、そんな私の拒絶心を無くしてもう一度戦争と向き合わせてくれた人物がいた。そう、「宮部久蔵」だ。私は、彼との出会いによって戦争に「愛」があることを知った。戦争に全く関係ない言葉のように思うかもしれない。しかし、考えてみてほしい。守りたいと思う人、大切に思ってくれる人がいるからこそ戦争とは「悲劇」や「残酷」という言葉と結びつくのではないだろうか？誰もがお国のために命を捧げても良いと本当に思っていたのなら、動く心無き屍で溢れ人類が減るまで戦争は続いていだろうか。戦争が終わりを迎えることができたのも、少なからず日本を、国民を大切に思う人がいたからではないだろうか？そして、今に戦争が語り継がれていること、戦争が起きていないこと、そういう当たり前と思っていることが「愛」によって子孫に語り継がれ大切な人と同じ思いをしてほしくないという願いの元に成り立っているのではないだろうか？私が彼の残した中で1番印象強い言葉がある。「もし、大石少尉がこの戦争を運良く生き残ったら、お願いがあります。私の家族が路頭に迷い、苦しんでいたなら、助けて欲しい。」これが戦闘機の不具合を見抜き助かるかもしれないチャンスを他人に譲り、死に行く人間の言葉とは到底思えない。私には彼の気持ちが理解できなかった。考えれば考えるほど、彼への怒りが込み上げてきた。そのチャンスを手放していなければ家族と再会し幸せに暮らせていたのかもしれないのに。その時、私ははっとした。彼は生きなかったけど生きられなかったのでは？と。その根拠とし

て、彼はこの言葉を残している。「俺の命は彼らの犠牲のうえにある。」ここからは私の想像であるが、彼は最初家族との約束を守るため必死に生きていた。しかし、自分が戦闘から逃れていることで多くの仲間や教え子が死んでいき、いつしか死んでいった彼らのために生きていた。そうして助かるチャンスを自ら手放したのも彼らへのせめてもの償いであった。

私の曾祖父はシベリアで戦死した。食べるものがなく餓死したらしい。どんな思いで迫りくる死の恐怖と闘っていたのだろう。私には想像もつかない。しかし、私にはこれだけはわかる。今生きている私たちの命は戦時中、必死に戦い必死に生きた人々の犠牲のうえにあるということ。

『永遠の0』 百田 尚樹 640ページ

## 〈高松キャンパス 千頁読破記〉

### 優秀賞

## 本を読むということ(千ページ読破記)

電気情報工学科4年 松下 祐子

私が、この夏休みに千ページ分の本を読もうと思った理由は2つあります。私は読書が趣味だと言える程には普段から本を読む機会は多いのですが、そのページ数まで気にして読んだことは無いため、どのくらいの量で千ページになるか気になったのが1つです。またもう1つは、私は最近、「小説家になろう」や個人サイト等のウェブサイトで素人の方が投稿した小説をスマートフォンで読むことが多いです。無料で沢山の作品を気軽に読むことが出来て重宝しているのですが、代わりに紙媒体の本を読むことが減り、紙の本の良さを改めて味わいたいと思ったからです。

千ページ分の本はシリーズ物で揃えたいと思い、西尾維新の「戯言シリーズ」を選びました。西尾維新の作品はライトノベルという括りであるため内容はミステリーでも、とても読みやすく、キャラクターも個性的な人物ばかりで愛着を湧かせやすいです。言葉遊びが多く含まれたユーモア溢れた文章には中毒性があり、その中に蜘蛛の巣のように張り巡らされた伏線には毎回驚かされ、トリックからイラストまで本の全てがファンの心を掴みます。私も初めて読んだ時からファンの1人となりました。

実は、このシリーズは私が小学校六年生の頃から高校に入る前までに姉の紹介で全て一度読んだことがありま

す。語り部で「戯言遣い」と呼ばれる青年いーちゃんと、主人公であるサヴァン症候群を持った天才少女玖渚友の二人に取り巻く殺人事件の物語です。その時にも何度か読み返したのですが、正直なところ内容の半分も理解出来ていないのでは無いかと思いました。そこで十代最後の年にもう一度読み、功名に仕組まれた伏線や登場人物の心理などをもっと深く知りたいと思ったため、本棚から取り出しました。

私は速く本を読んでその物語の行く末を知りたいがあまり、人物の声以外を読み飛ばしてしまう癖があります。しかし、今回ははっきりと分からない単語の意味を調べて、ゆっくりと読むことを心掛けました。そうすることで活字の全てをじっくりと自分の中で噛み砕きながら、語り部の心理状況を想像し、行間を想像し、伏線を回収しトリックを理解することが出来ました。戯言シリーズには隠されたことや、深く描写されない登場人物の過去などが多いです。語り部のいーちゃんに至っては本名すら分からず、所々に散らばったヒントしか無いため、ファンの間で議論が繰り広げられています。そのため、内容を完璧に理解しているのは作者本人だけだと思うのですが、今回再び読み上げたことで、前に勘違いしていた部分もあり、前よりかは真相に近づけたのではないかと思います。

読み切った後には達成感というよりかは充実感でいっぱいになりました。本は1ページ二段形式でしたが、千ページは思ったより少なく、読んでいる間は殆ど集中力を切らしませんでした。沢山の想像や考察を繰り返すことで登場人物がより一層好きになりました。また、彼らの心の中を想像することは彼らに生命を与えることと同義だと感じました。勿論、物語と彼らの生みの親は創造者の西尾維新唯一人ではありますが、それに生命を吹き込み、生かすことが読者の創造であり、本というのは作者の独り語りではなく、読者も想像を繰り返すことで作者の言葉に返事をするのできるのだなあと感じました。

今回で、物語の内容を理解するだけでなく、拙い考えだけでも本を読むことの本質を見ることが出来ました。また、じっくりと読むには目が疲れにくい紙の本が良く、また紙の質感も本によって結構違いがあるため、それが好きだと思いました。しかし今回この作文はパソコンのワードで書いています。やはりデジタルの手軽さというのも大変魅力的です。本を読む上でのデジタルとアナログ、どちらも適材適所に利用して、これからも沢山の物語を読んでいきたいです。

全て著者西尾維新、講談社出版

クビキリサイクル青色サヴァンと戯言遣い	p382
クビシメロマンチスト人間失格・零崎人識	p382
クビツリハイスクール戯言使いの弟子	p198
サイコロジカル(上) 兎吊木塚輔の戯言殺し	p246
サイコロジカル(下) 曳かれ者の小唄	p296
ヒトクイマジカル殺戮奇術の匂宮兄妹	p477
ネコソギラジカル(上) 一三階段	p374
ネコソギラジカル(中) 赤き征裁vs.橙なる種	p374
ネコソギラジカル(下) 青色サヴァンと戯言遣い	p374

## 優秀賞

### 芸術を感じること

電気情報工学科3年 安丸 怜那

芸術鑑賞とは、芸術批評を丸暗記することなのだろうか。

芸術というものを語るとき、よく作品の背景や作者の生涯という言葉が飛び交う。そんな要素を盛り込んだ芸術批評は、私にはどうも愚鈍に感じられる。つらつらと言葉を並べ、自分の文章までも、さも芸術であるかのように振る舞っている。そんなものを目にしたら、私のような素人は立派な説明のついた芸術作品を、疑うことなく素晴らしいものと錯覚してしまう。

では、私たちはどうやって芸術作品を感じればいいのか。

私はアルフレッド・シスレーの絵画が好きだ。優しく柔らかで、どこか物悲しい、そんな儂い雰囲気があると思っている。しかし、専門家からの評価は低い。生前の絵画の売れ行きや、歴史的な背景、題材等を考慮しているらしいが、なんとも意見が食い違う。

数多の絵画を研究している専門家と、絵画の「か」の字も理解しているかどうか微妙な私。そんな私が専門家の考えに不満を述べるなど、傲慢もいいところだと辟易するだろうが、如何せん正直な感想なのだ。

音楽や彫刻、演劇など芸術にも様々な種類がある。そして世間には、「果たしてそれは芸術と呼ばれるべきものなのか」と、疑問が付き纏うものも存在している。そして、私はそのどれの専門家でもない。だから、その道のことには分からない。全く分からない。これが世の中の大多数の人の、芸術に対する意見であると思う。そんな人たちが芸術を判断する方法は、もはや2つしかないであろう。

1つは「専門家の意見」であり、もう1つは「独断と偏見に基づいた一個人の感情」である。それは、「偉い人

が言っているからそうなのだろう」と、「なんか気に入らない」だ。どちらも有りがちな傾向であり、そしてどちらもあまりにも無責任だ。私もそうである。実際私はアルフレッド・シスレーの絵画が好きだが、全て好きなわけではない。正確に言うと、「セーヌ川岸にある村」という絵画が好きなのだ。響かない絵画は一切響かない。

ならば、芸術批評はどうあるべきなのか。

世の中の評価は極めて無責任だ。となると、できるだけ公平に判断するために、様々な要素を盛り込まなくてはならない。芸術批評は、愚鈍にならざるを得なかったのだ。そのことから、芸術批評を基として芸術を判断するのは少々勿体ない気がする。よって、芸術批評を1つの意見として聞き、そこから判断するのがいいのではないだろうか。芸術の裏話、舞台となった土地などの知識を持っているのは素晴らしいと思うが、それは私たちにとっての装飾品のようなものであり、芸術の本質ではないだろう。

芸術は、一過性の感情の具現化だと思う。だから、判断する私たちも一過性の感情に任せてもいいのではないだろうか。好きなものは好き。嫌いなものは嫌い。そこに正も悪もない。作者の人格、技法等は一先ず遮断して、作品だけを感じる。そんな見方も良いのではないだろうか。作者の名前を聞いて輝かしく見える作品ほど、可哀想なものはないと思う。激しく鋭利で見る者の胸を切り裂く、そんな作品の衝撃はととも忘れられない。そして、それも一過性のものである。偶然と偶然が重なった奇跡。そんな儂さに人々は感動するのだと思う。

教養という側面だけの芸術鑑賞は、作品は勿論私たちにとっても、酷薄に感じられる。

木村泰司『名画は嘘をつく』大和書房	253頁
沢辺有司『ワケありな名画』彩図社	222頁
中野京子『怖い絵』朝日出版社	246頁
中野京子『怖い絵2』朝日出版社	249頁
小池寿子 芸術新潮編集部『一日で鑑賞するルーヴル美術館』新潮社	151頁
大橋巨泉『知識ゼロからの印象派絵画入門』幻冬舎	151頁
佐藤晃子『この絵、どこがすごいの?』往来社	157頁

## 〈高松キャンパス 夏休み体験文〉

### 優秀賞

## 夏休み体験文

電気情報工学科4年 平尾 知也

私は、この夏休み、特に誰かと遊んだりする予定も立

ていなかったもので、ひたすら家とバイト先を往復する生活をしていました。そのバイト中にレジを打っていると、お客さんがうずらの卵を買っているのが目に入りました。僕は、「うずらの卵は小さいし、ニワトリの卵とあまり値段も変わらないのだからニワトリの卵を買ったほうがよくないのか?」と考えました。その日家に帰った私は、スマートフォンでうずらの卵の料理を検索しようとすると、検索候補に、「うずら孵化」というものが出てきました。生き物が好きで、ヘビやハリネズミを10匹ほど飼っている私は、うずらの孵化に興味をもってしまいました。そしてそこからは一週間ほどうずらの孵化について調べました。分かったことは、うずらの卵は、スーパーなどで市販されているものでも、孵化させることが可能だということです。なぜなら、ウズラ農家は、うずらがヒナの時点で雄雌判別をするらしいのですが、これがプロでもたまに間違えることがあるらしく、雄が混ざってしまうことが稀にあるとの事です。そしてどこかで交尾をしてしまい、有精卵が市販されるという訳なのです。

そして、このうずらの卵の孵化方法なのですが、湿度60パーセントで、温度37.5度を維持し、転卵と呼ばれる卵の殻に黄身をくっつかないようにする作業が必要らしいです。そこで私は、発泡スチロールと、爬虫類用のパネルヒーター、遠赤外線ヒーター、温度管理用のサーモスタッドを用意しました。ためしにこの設備で作ってみたものの、サーモスタッドの管理できる温度が35度までしか設定できないことに気付き、悩んだ末、サーモスタッドのセンサーを熱源から少し離して、熱源の真下が38度程度になるまで微調節をくり返しました。もうこのあたりで集中力の続かない私のやる気はどんどん下がってきます。「私は夏休みに友達と遊ぶこともなくうずらの卵を相手に何をやっているんだろう。」という疑問がずっと頭の中で回っていました。しかしそれでもここまでやったのだから、という気持ちでスーパーにうずらの卵を買に行きました。最初はバイクで買いに行ったら卵がグチャグチャになるというハプニングがありました。気を取り直して歩いて買いに行きました。3パック、計30個の卵を買ってきた私は、卵の裏表が分かるように片面に落書きをして、発泡スチロールの中に並べました。これでは後は数時間ごとの転卵を2週間くらい続けるだけになりました。しかしこの2週間有精卵が無精卵か分からないまま転卵し続けるのか?という、そうではありません。生き物の卵は、検卵という作業をすることで、胚が発生しているかどうかを確かめることができるのです。その方法はというと、卵の下からライトで卵を照らすだけの簡単なものです。そうすることで血管など